

風の質が変わった。  
昼夜の寒暖の差が大きくなった。  
虫の鳴き声、花々の移ろいに秋を感じるようになった。  
草花に朝露が光って白く見える頃、二十四節気では、白露という。

ふるさとの風  
平成二十七年 長月  
～秋草百花繚乱の頃～

# 萬金丹

—伊勢の伝統薬—

秋の野に 咲きたる花を 指折りかき数ふれば 七種の花

萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝顔の花

山上憶良

秋の野は、秋の七草を代表とする草花が主役。

秋の野の花が咲き乱れる野原を「花野」といい、古来より季の詞として詠まれてきた。山野や庭に咲く様々な秋の花、多彩な秋の野は「八千草」と呼ばれ、秋風に静かにゆれる花々は、春の華やかな装いとは趣を変え優美な風情を感じさせる。

春の七草は、芹、なずな、御行、はこべら、仏の座、すずな、すずしろ。七草粥の材料として食され、邪気を払い、無病息災を得られるばかりでなく、冬場に不足がちな野菜類を補い、正月料理で疲れた胃を休める効能があるとされる。

一般に、春の七草は食用、秋の七草は鑑賞用といわれるが、葛の根が感冒薬の葛根湯かつこんとうの主成分であるように、秋の七草は薬草としても用いられている。

日本最古の歴史書『古事記』にも薬草にまつわる話が登場する。“因幡の白兔”の物語である。皮を剥がれて丸裸にされて苦しんでいる兔を憐れんだ大国主命は、「真水で体を洗い、蒲の花粉を体にまぶしなさい。」と教える。その通りにしたところ、兔の体は回復する。

丸裸にされた兔を救ったのは、蒲の花穂の黄色い花粉ほお（蒲黄）だった。

これが、日本の薬草の始まりとする説もある。

蒲は、水辺に多い多年草の植物であるが、その花粉を乾燥させ内服すると止血、利尿作用があり、切り傷、火傷には、直接塗布すると効能があるとされる。中国の漢の時代に編纂された『神農本草経』しんのうほんぞうきょうにも蒲黄の名で止血薬として記載されている。

身近な自然の中で育まれてきた野草には、驚くほどの生命力と隠された力が備わっている。人類は、長い歴史の中で薬用となる植物を見出し、薬草が中心となる伝統医学を発展させた。現在、薬草の数は、身の回りの植物のおよそ一割であるとされる。これらの植物は各国の伝統医療に使われ、その一部は医薬品原料としても利用されている。

日本各地にも、昔から地域に根付いた伝統薬がある。その効能は、人々の日々の暮らしの歩みの中で裏付けされ、伝統薬は身近な存在として庶民と固く結びつき今日に及んでいる。また、諸国の街道沿いでは多くの種類の薬が売られ、旅人の体を癒したり、道中土産として大変重宝がられたという。

古くは江戸時代以前から続くものもあり、さまざまなエピソードを持つ伝統薬は、日本固有の文化的価値も高いのである。

#### 「越中富山の反魂丹、鼻くそ丸めて萬金丹」

俗謡でも親しまれてきた伊勢の「萬金丹」は、越中富山の「反魂丹」と並ぶ全国的知名度の高い漢方薬である。阿仙薬や甘草・桂皮などの生薬を練り固めた丸薬で、主に胃腸の不調を改善する。

「反魂丹」は行商で普及したのに対して、「萬金丹」は伊勢暦、伊勢白粉（軽粉）、煙草入れ等と共に伊勢路の参宮土産物として名を馳せた。

伊勢は、古くからお伊勢参りの人々が訪れており、江戸時代には、村ごとに積み立てをして参詣する「伊勢講」という組織が日本全国に定着した。村の代参人は、荷物にならず実益のある薬を参宮の土産物として持ち帰り、喜ばれたという。また、旅人が印籠などに入れて持ち歩き懐中薬として重宝したともある。当時の多くの道中記にて、「萬金丹」の文字を確認することができる。

「萬金丹」は、胃腸病はじめ万病に効く妙薬として全国に広まっていったのである。

山田の参宮街道に面した沿道には、萬金丹の看板を掲げた店が数多く居を構え、数多くの種類の萬金丹が販売されていた。しかし、長い歴史の中で一時期二十社以上あった業者は廃業が相次ぎ、「野間萬金丹」と「小西萬金丹」の二社を残すばかりとなったが、現在は、「小西萬金丹」一社が、製造を県外に委託し販売のみを行っている。また、伊勢くすり本舗株式会社が、伊勢の伝統薬「萬金丹」の復活を目指し、“伊勢萬金丹”の名称で販売を開始している。

『三重県薬業史』によれば、伊勢の萬金丹は、朝熊岳から起こる「野間の萬金丹」と「護摩堂明王院に起源する萬金丹」、山麓の朝熊村から出る「秋田教方中倉萬金丹」、そして「小西萬金丹」の四つの流れに大きく別れるとある。

#### 〈野間萬金丹〉

南北朝時代、尾張国の豪族・野間宗祐が仏地禅師に随行して朝熊岳に移住。虚空蔵菩薩の信仰厚い宗祐は靈薬の秘法を菩薩から授かり創薬したと伝えられる。

「お伊勢参らば朝熊をかけよ。朝熊かけねば片参り」と、いわれたように朝熊山は伊勢神宮の鬼門を守る靈山。江戸時代になると、伊勢神宮参拝後、金剛證寺に詣でた人々が伊勢の靈薬として求めていったという。

野間萬金丹は、当初、朝熊山金剛證寺に本店、妙見町（現尾上町）に支店を設け大いに繁盛した。また、京都の宮家へ献ずるにいたって、官名を賜っている。明治に入り、野間園彦が当主を名乗り盛業を極めていた。しかし、昭和十九年の朝熊山ケーブル廃止により朝

熊詣が激減し販売量が減少、加えての敗戦、さらに、伊勢湾台風による店舗の大被害等で本店が閉鎖。その後、支店のみの営業になり野間製薬が販売していたが、やがて廃業となった。旧街道にあったとされる山門に通じる本店の立派な店構えは、写真や絵葉書で見ると限りかつての栄華を偲ばせるものである。

#### 〈金剛證寺の護摩堂明王院の萬金丹〉

護摩堂明王院の尊隆から寛保元年（1741）五月十五日、山原伝四郎他三名に宛てた薬方の相伝書によると、当院四代以前の住職尊光が、霊夢によって薬味を調合し、世人に施して病難を救ったとある。明治初年まで、妙見町に出店を設け販売していたが、いち早く没落したと伝えられる。

#### 〈岩城萬金丹（秋田教方萬金丹）〉

この処方のはじめは、秋田城之介（秋田藩主）安倍実季から伝えられたとされる。平安時代、安倍晴明が遣唐使として入唐中、一隠士より秘法を預かったのが元で、後世、同族である奥州三春城主秋田信濃守城之介安倍実季に相伝した。実季は国内の不取締りの罪により、寛永八年（1631）伊勢国朝熊山麓に謫居となり、その際、官を退いて同地に住んでいた中倉義元と懇意になった。実季は、秘薬（萬金丹）の処方が失われるのを恐れて薬方にも詳しい義元に伝授したのである。これを、中倉家秘法として製薬し、七代目忠悦の代には医業も修め、京都に出て伊勢大掾を拜した。「岩城萬金丹」の「岩城」は石城山永松寺の山号より採り、岩城萬金丹には「秋田侯御教方」を冠している。実季は、和歌をはじめ、書道、茶道にも通じる風雅人で、皇大神宮一禰宜藤波氏富とは入魂の間柄であったという。金剛証寺末寺の石城山永松寺には、実季の墓碑がある。

#### 〈小西萬金丹〉

伊勢神宮外宮の門前、八日市場に店を構える小西萬金丹本舗は、伊勢国司北畠具教の家臣日置越後守清久に始まる。天正四年（1576）主家滅亡後、清久は医道を志し泉州堺の小西家より製薬の秘法を譲り受けた。家名を小西と改め、伊勢山田の八日市場に延宝四年（1676）薬舗を創業し、萬金丹を発売した。二代目清勝は、元禄年間に京都と四日市日永に出店、三代目清聿は、正徳年間に江戸・近江草津・伊賀名張に出店を増した。薬事に詳しい清聿は、江戸の医学者と交流を持ち新薬の研究に務め、“治効圓”“千金聖遺丸”の二種を創案、販売している。当時、“治効圓”は、萬金丹よりよく売れたとある。

享保八年（1723）、小西萬金丹は、宮家より職人の最高位である大和掾の名を賜り明治維新に至る八代の間、小西大和掾を称し名声を高めた。

安永二年（1773）の『宮川夜話草』に、次のように書かれている。

#### 小西萬金丹

山田八日市場に在、享保年中小西大和掾と受領せり、  
家法に治香圓といふ小兒の丸薬萬金丹より能行へり

また、『三重県薬業史』には、「故實郷談」と云ふ書物に「小西大和掾萬金丹は朝熊岳よりは古し、「享保年中に大和掾を受領す」とあり、その歴史の深さが窺われる。

明治以降、小西清香の商標で治効圓・萬金丹を商い、現在は、十六代目が当主を継ぐ。  
健康維持食品として販売され愛用する人も多いという。

外宮にほど近い旧参宮街道沿い、重厚な建物の小西萬金丹本舗が佇む。  
木造二階建て百四十四平方メートルの店舗兼主屋は、伊勢の商家特有の切妻入りの造りで、刻み囲いと出格子の伊勢の町を代表する町屋建築。明治年間に宮大工によって初期の姿のままに建て替えられたという。主屋北側には内蔵、北東側には外蔵がある。  
開け放たれた十畳の店の間の一角には、歴史の重みと風格を感じさせる黒塗り金文字の看板や薬箱、山水の衝立が置かれ、行き交う人々の目を惹く。店舗は、「まちかど博物館」として公開しており、薬研や壺、乳鉢、温度計など、往時の製薬・調剤道具を見学でき、萬金丹製造の工程を知ることができる。  
今年三月、小西萬金丹本舗の店舗兼主屋と内蔵、外蔵の三件は、明治期の貴重な町屋建築として評価され、国土の歴史的景観に寄与しているものとして、国の登録有形文化財（建造物）に選ばれた。

その昔、伊勢参宮の人々は、宮川の上（柳）・下（桜）のいずれかの渡しを利用して山田の町に足を踏み入れ、そして、念願の伊勢神宮に辿り着く事ができたのである。  
室町時代頃から、山田の玄関口、筋向橋から外宮までの間の約一キロメートルの辺りに、参宮客を相手に市が立ち始めた。八のつく日に市が開かれたので八日市場という地名が生まれ、江戸時代になると、参宮街道の発達とともに賑わいをみせ、やがて山田の町の中心となった。

「小西萬金丹本舗」は、その外宮の門前で長きにわたり伊勢参宮の人々を出迎えていたの  
である。そして、今もなお当時の面影を残したまま、六百年の歴史を持つ胃腸薬「萬金丹」  
を送り出している。

お伊勢詣りの伝統に支えられた神仙萬金丹—

医薬界の文化遺産ともいえるのではないだろうか。

華美な曼珠沙華の花が道々を彩り始め、

里山に秋の訪れを告げた…。

有毒植物とされている曼珠沙華。この花の地下茎を漢方では石蒜せきさんと呼び薬として用いられています。  
また、澱粉に富むところから、救荒食糧として、晒して食用にされていたことがあるそうです。



萬金丹

—伊勢の伝統薬—

【参考文献】

「伊勢の薬萬金丹」(雲出川第30号) 飯田良樹/著 L689/イ

「三重県薬業史」 伊藤長次郎/編 ミエ薬報社 L499/イ

「正統神都百物語」 松木時彦/著 古川書店 L243/マ

「伊勢の古市夜話」 野村可通/著 三重県郷土資料刊行会 L243/ノ

「伊勢市の民俗」 伊勢市民俗調査会/編著 伊勢文化会議所 L380/イ

「伊勢山田散策ふるさと再発見」 濱口主一/著 伊勢郷土会 L243/ハ

「伊勢市史 第3巻近世編」 伊勢市/編 L243/イ/3

「宇治山田市史 上巻」 宇治山田市役所/編 L243/ウ/1

「伊勢詣と江戸の旅」 金森敦子/著 文藝春秋 L384/カ

「神宮随筆大成後編(宮川夜話草)」 吉川弘文館 L174/ダ/16

「伝承薬の事典」 鈴木昶/著 東京堂出版 4997/ス

「伊勢みやげ考 温故知新」 伊勢みやげ研究会 L689/イ

「日本の名薬」 山崎光夫/著 東洋経済新報社 (三重県立図書館蔵)

「江戸の妙薬」 鈴木昶/著 岩崎美術社 4997/ス

「薬草の科学」 佐竹元吉/著 日刊工業新聞社 4998/サ

